

2017 年「ガラス産業連合会新年会」報告

(一社) ニューガラスフォーラム事務局

Report on the New Year Party 2017 of the Glass Industry Conference



左から、電気硝子工業会及びニューガラスフォーラム、板硝子協会、硝子繊維協会、日本硝子製品工業会、日本ガラスびん協会の各会長

2017 年 1 月 20 日（金）、この日は時折小雪が舞うたいへん厳しい寒さの一日でしたが、恒例となりました「ガラス産業連合会（GIC）新年会」が、東京都千代田区の如水会館にて開催されました。ガラス産業連合会は 2000 年 3 月に設立され、この新年会は翌々年の 2002 年から続いており、今年で第 16 回目となりました。今回も経済産業省、学界、会員企業、関連団体、報道機関等合計 359 名の参加を得、昨年を上回る盛況となりました。この新年会は、

ガラス産業連合会に加盟する板硝子協会、硝子繊維協会、一般社団法人日本硝子製品工業会、日本ガラスびん協会、電気硝子工業会、一般社団法人ニューガラスフォーラムの 6 団体で主催しており、今年は電気硝子工業会の瀬上信専務理事の司会により行われました。

加盟 6 団体の、皿澤修一板硝子協会会長（セントラル硝子株式会社代表取締役社長執行役員）、フランシス・ショレー硝子繊維協会会長（マグ・イゾベール株式会社代表取締役社長）、

岡本毅硝子製品工業会会長（岡本硝子株式会社代表取締役社長）、山村幸治日本ガラスびん協会会長（日本山村硝子株式会社代表取締役社長）、そして、有岡雅行電気硝子工業会会長兼ニューガラスフォーラム会長（日本電気硝子株式会社代表取締役会長）の各会長紹介に続き、ガラス産業連合会の有岡会長から挨拶がありました。その要旨は次の通りでした。



2016年度も共通課題である環境問題を中心に官公庁のご協力のもと、活動を展開してきた。2017年度もガラス産業共通の課題である環境、省エネ問題に力点を置き、将来のガラス産業を支える「学」の方々との関係をより一層強固なものにしていきたい。昨年は、日本の熊本地震や海外の異常気象、中東内戦、難民問題、UKのEU離脱等の様々な問題もあって、経済面で停滞感もあったが、アメリカ経済の堅調と各国の財政出動に支えられ、低空飛行ではあるが好調を持続できた1年であった。2017年は米大統領選の結果もあって、景気回復期待が先行し、何となく明るいスタートを切ったかのように見えるが、一方で、様々な不安材料があることも事実である。そんな中で、ものづくりを中心として実体経済を支える我々は、社会にとって魅力ある製品をいかに作っていくかが重要である。歴史上、社会の大きな変化には必ず新しい素材の発明がつきものと言われている。最も古い素材の一つであるガラスは、その特性を社会の要求に合わせて進化し生き残って

きた希な材料であり、今後も必ず生き残っていく素材と信じている。そのためには、それを成し遂げる人材が必要となる。また今の社会では「産」の中の連携はもちろん、「産官学」が総力で戦う時代になっている。

昨年のこの新年会で、国際ガラス会議(ICG)の2018年日本開催が決まった旨の報告がなされ、参加と支援が呼びかけられた。本年はいよいよ具体的な準備活動がなされる年である。ICGはガラスに携わるものにとっては最大のイベントで、その成功のためには「学」だけではなく「官」のご指導と「産」の支援なしにはあり得ないと考える。また、2018年年会の成功を踏まえて、3年に1度開催される2025年大会の立候補につなげていければ、と考える。「学」の充実が無ければガラス産業の発展はあり得ない。「学」で育まれた人材とサイエンスの「産」への寄与は、中長期的に非常に重要である。これらの意味においても、会員の皆様には、ガラス産業発展のために賛同をお願いしたい。今年は、ガラス産業にとって良い年にしたい。

次に、ご来賓代表として、佐藤文一経済産業省製造産業局大臣官房審議官からご祝辞があり、その要旨は次の通りでした。



住宅省エネ、健康、快適、防犯、防災等がこれまで以上に重要になり、中長期的には品質や機能への対応がますます重要になってくる。電子、自動車、住宅等すべての分野で高機能化が

重要になり、経済産業省でもその辺に軸足を置いて取り組みを進めたい。たとえば、工場、事業所、住宅等の省エネでは、来年度予算としてその投資推進に向けた補助金を670億円計上している。産業界でも是非活用して欲しい。今年4月からは、非住宅建築物の省エネ基準適用義務化が始まる。ガラス業界にとっても、付加価値の高い製品の普及を図るチャンスにもなる。今後の新しい時代を乗り切るためにも、新たな製造投資や新しい時代にふさわしい人材の育成を行って人的生産性を高める等を行い、日本の優れた製品を世界にPRしてもらえれば、と考える。

その後、皿澤修一ガラス産業連合会副会長による乾杯のご発声により歓談となりました。



今回は歓談の途中で、昨年10月9日に、東京学芸大学小金井キャンパスで開催された「2016 青少年のための科学の祭典」にガラス産業連合会の情報発信活動の一環で参加した時の状況がビデオ放映されました。GIC活動の一端を紹介することができた良い試みであったかと思っています。



16時から始まったガラス産業連合会の新年会でしたが、歓談の時間は瞬く間に経過し、最後に、牧島亮男ガラス産業連合会理事が、特に「学」の立場から、基礎研究の重要性和グローバル化(国際化)の推進をさらに積極的に進め、育った人材を産業界に送り出すことが重要であると挨拶し、中締めとなりました。

「産学官」で世界に向け総力で取り組みを進め、また、来年も盛大にガラス産業連合会の新年会が行われることを大いに祈念したいと思います。

